



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



## スペイン語とルーマニア語における定冠詞の分布について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 北海道言語研究会 公開日: 2019-09-04 キーワード (Ja): キーワード (En): definite article, Spanish, Romanian 作成者: 藤田, 健 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/00009998">http://hdl.handle.net/10258/00009998</a>

# スペイン語とルーマニア語における 定冠詞の分布について

藤田 健

## Distribution of the Definite Articles in Spanish and Romanian

Takeshi FUJITA

**要旨** : The definite article occupies the primary position in the article system both in Spanish and in Romanian. We examine the syntactic distribution of the definite article in a corpus, taking into account the distributional correspondence between the definite article and other determiners, the null article included. We conclude that the Spanish and Romanian definite articles have both a close connection with the null article and that the Romanian definite article assumes a part of the functions of the possessive adjectives in Spanish. It is also confirmed that the Romanian definite article has important morpho-syntactic characteristics which are not found in the Spanish one.

**キーワード** : definite article, Spanish, Romanian

### 1. 序論

冠詞は、この文法カテゴリーを有する言語において、名詞句において極めて重要な文法的役割をはたす。その中でも、ロマンス諸語は冠詞体系が発達している言語群であると言えるが、個々の冠詞の機能については言語間で差異が観察される場合がある。スペイン語は同グループの中では、冠詞の体系化がそれほど進んではいない言語であると言える。これに対し、ルーマニア語は冠詞が他のロマンス諸語には見られない形態統語的な特徴を有しており、それが分布にも影響している。スペイン語の冠詞については様々な観点から研究が進められているが、ルーマニア語に関してはあまり行われておらず、両言語間の対照的視点からの研究となると皆無と言ってよいのが現状である。

冠詞の中でも、定冠詞は多くの機能を有し、最も使用頻度が高い要素である。定冠詞の機能を考察する上では、定の決定詞としての位置づけが極めて重要である。定の決定詞全体の中で定冠詞の分布・機能を考察することによって、はじめて明らかにな

る本質が存在する。本稿では、スペイン語とルーマニア語の定冠詞の機能を対照的に考察すべく、その分布を詳細に検討し、指示形容詞や所有形容詞といった他の定の決定詞との対応に焦点をあてて分析を進めていく。これにより、定冠詞・不定冠詞・部分冠詞という冠詞体系内のみでの考察ではとらえられない定冠詞の特質を明らかにしたい<sup>1</sup>。

## 2. 両言語における定冠詞の位置づけ

ここでは、スペイン語とルーマニア語の定冠詞が従来どのように分析され、どのような形で位置づけられてきたかを見るために、先行研究を概観する。

### 2.1. スペイン語

スペイン語は、二つのカテゴリーからなる冠詞体系をもつと考えられている。すなわち、定冠詞と不定冠詞であり、フランス語等のように部分冠詞というカテゴリーが設定されることはない<sup>2</sup>。それは、物質名詞や抽象名詞の不定量を冠詞として標示する要素が存在しないからである。

Hernández Alonso(1984)は、定冠詞は依存的で強勢を持たず、語源であるラテン語の指示詞から継承した直示的機能を持つ記号であると定義し、それ自体の意味内容を欠き、一般的な性質を持つ指示子(indicador)であると主張する(p.569)。Leonetti(1999)は、定冠詞を定義づける上で重要な二つの素性として、既知の情報(información consabida o conocida)と唯一性(unicidad)をあげている(pp.791-792)。ここで唯一性とは、文脈において関与する唯一の実体を示すことを意味している。定冠詞の機能は、Satorre Grau(2000)によると、聞き手(oyente)が話し手(hablante)と共有している、あるいは既に提示されていることによって、その指示対象を知っている名詞句を現働化することである。指示詞や所有詞と同様に、直示的(deíctico)で基本的に指示的(referencial)な要素であり、同定的(identificador)な機能を有する(p.282)。以下の例では、不定冠詞によって導入された初出の名詞句を、定冠詞で再提示している。

- (1) Ayer compré un libro. El libro tenía dentro una hoja de papel. En la hoja  
yesterday I bought a book the book had inside a piece of paper in the piece  
estaba escrito un mensaje.  
was written a message  
“昨日一冊の本を買った。その本の中には一枚の紙切れが入っていた。その紙切れ  
にはメッセージが書かれてあった。”

また、定冠詞の大きな特徴として一般化(generalizador)の機能があり、名詞句によって指示される種(especie)を集合全体として指示することによって総称的(genérico)な

<sup>1</sup> 本研究は、平成30年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C) (課題番号 15K02465) による研究成果の一部である。本稿の執筆にあたり、査読者から大変有益なコメントや誤り・不適切な表現の指摘を数多くいただいた。ここに深く謝意を表するものである。

<sup>2</sup> Hernández Alonso(1984)や López García(1998)は、冠詞というカテゴリーに含まれるのはいわゆる定冠詞のみで、不定冠詞は不定の数量詞として位置付けている。このような見方はスペイン語学の領域においては一定の位置を占めているものではあるが、本稿では通言語学的な視点に立ち、冠詞は定冠詞と不定冠詞からなるという一般的な立場をとる。

意味をもつ(p.284)。

(2) La naranja es una fruta.

the orange is a fruit “オレンジは果物である。”

Leonetti は定冠詞の機能を、照応的用法、直示的用法、連想的照応用法、様々な種類の知識に基づいた非照応的用法、修飾要素の存在に基づいた非照応的用法の五つに分類する。

Matte Bon(1995)は、定冠詞を含む冠詞は演算子(operador)であるとし、定冠詞は1)発話者が名詞句に関して抽象的な性質のみならず、具体的な実体を問題にしていることを示す、2)既に先行文脈において現れた名詞を指示することから前提を構成する、という二重の機能を有するとする(p.216)。これに対して、López García(1998)は数詞や不定の決定詞を伴う数量表現(expresiones cuantificadas)は演算子によって束縛される変項(variables)であるのに対し、定冠詞・指示詞・所有詞を伴う名詞句は定項(constantes)であるにとらえている(p.283)。また、Salvá(1988)は、スペイン語において定冠詞は3人称人称代名詞と遠称の指示形容詞 *aquel* と極めて密接な関係を保っていると述べる(p.353)。

2.2. ルーマニア語

ルーマニア語の定冠詞は、他のロマンス諸語とは異なる形式と機能を有している。以下にその特徴を概観する。

2.2.1.形式

ルーマニア語の定冠詞は、名詞に先行するのではなく、前接語(enclitic)として名詞に後続するという形態的特徴をもつ。定冠詞が名詞に後続している名詞形式は定冠詞形と呼ばれる。他のロマンス諸語とは異なり、ルーマニア語には主格・対格と属格・与格の形態的対立が人称代名詞のみならず名詞にも存在し、定冠詞も名詞の格に応じて変化する<sup>3</sup>。以下に例を示す。

(3)

単数無冠詞形	単数定冠詞 主格・対格形	単数定冠詞 属格・与格形	複数無冠詞形	複数定冠詞 主格・対格形	複数定冠詞 属格・与格形
pom「木」	pomul	pomului	pomi	pomii	pomilor

これに加えて、ルーマニア語には独特の冠詞が存在する。一つは指示冠詞(*articolul demonstrativ*)もしくは形容冠詞(*articolul adjectival*)と呼ばれる形式で、様々な機能を持つが、代表的な機能の一つとして、形容詞の最上級の形成があげられる<sup>4</sup>。これ

<sup>3</sup> 厳密には呼格も存在するが、ルーマニア語の格体系においては周縁的であると考えられるため、本稿では省略する。

<sup>4</sup> その他に代表的な機能として、形容詞や「前置詞 de+名詞・代名詞」に先行してこれらの要素を名詞化したり、定冠詞形名詞に後続する形容詞に付加されて特定性を表す機能などがある。

a. cel roșu                      b. casa cea albă  
指示冠詞 red “赤いもの”                      house-the 指示冠詞 white “その白い家”

前者の機能はスペイン語の定冠詞にも見られるが、後者はスペイン語には存在しない機能である。

は、スペイン語の定冠詞がはたす機能と共通している。

(4) cel mai mare oraș

指示冠詞 more big city “一番大きい都市”

もう一つは所有冠詞(*articolul posesiv*)と呼ばれる形式で、代表的な機能として、定冠詞形でない名詞に属格形名詞が修飾要素として後続する場合に、両者を連結する機能があげられる。この場合、所有冠詞は先行する名詞と性数一致する。

(5) o scrisoare a scriitorului

a letter (女性) 所有冠詞 (女性形) writer's-the “作家の手紙”

この機能はスペイン語の定冠詞には存在しないものである。これに対して、共通する機能と考えられるのは、以下のように後続する所有形容詞とともに所有代名詞の働きをするというものである。

(6) mașina este a mea. “その車は私のだ。”

car-the is 所有冠詞 mine

このように、ルーマニア語の指示冠詞と所有冠詞は、必ずしもスペイン語の定冠詞と同じ機能をはたすわけではないが、共通する機能も見られる。本稿ではスペイン語との対照言語学的観点から、共通する機能についてはこの二つの冠詞を定冠詞と同等に扱うものとする<sup>5</sup>。

### 2.2.2. 機能

定冠詞を含む冠詞(以下定冠詞類と呼ぶ)の機能を詳細に提示したものとして、Pană Dindelegan(2003)があげられる。ここでは、これに従い、定冠詞類の様々な機能を概観する。

まず重要な機能としてあげられるのは、意味機能である。それは名詞の現働化(*actualizare*)、すなわち個別化(*individualizare*)、決定(*determinare*)であり、名詞によって指示される対象のクラスを対話者にとって既知である、あるいは同定可能である対象に限定することである。この個別化の機能には、照応的(*anaforic*)機能と直示的(*deictic*)機能がある(pp.33-34)。(7)の a が照応的機能の例で、b が直示的機能の例である。

(7) a. Am primit un câine. Câinele mi-a făcut mare plăcere.

I received a dog dog-the me made big pleasure

“私は一匹の犬を迎え入れた。その犬は私に大いなる喜びを与えた。”

b. Dă-mi cartea!

give-me book-the “(ジェスチャーで示しながら) その本をちょうだい。”

<sup>5</sup> Guillerrou(1953), Goga(2001), Pană Dindelegan(2003), Negritescu and Arrigoni(2014)では指示冠詞と所有冠詞を定冠詞とは区別しているが、Lombard(1974)はこの二つを定冠詞の一種とみなしている。この文献はフランス語で書かれていることから、フランス語の定冠詞と共通の機能をもつ点を重視したためであると考えられる。

定冠詞の機能を複雑にしているのが、個別化とは相反するいわゆる総称的(generic)解釈である。この解釈はどのような統語的位置においても可能である(p.34)。

(8) a. Câinele este un animal devotat omului.

dog-the is an animal faithful to-man-the  
“犬は人間に忠実な動物だ。”

b. Ador câinele pentru devotamentul lui.

I like dog-the for devotion-the its  
“私はその忠実さゆえに犬が大好きだ。”

c. În componenta lui GN, apare un adjectiv<sup>6</sup>.

in construction-the of NP appears an adjective  
“名詞句構造の中に形容詞は現れる。”

指示冠詞・所有冠詞に関しては、個別化の機能を有しているという点については疑問が残る。指示冠詞は、指示的なニュアンスを加えることによって定冠詞の決定の機能を強める。省略されても意味的な情報は失われず、強調の意味が失われるだけである(pp.35-36)。

(9) a. caietul cel nou                      b. caietul nou

notebook-the 指示冠詞 new                      notebook-the new  
“その新しいノート”                      “新しいノート”

所有冠詞は決定の機能を持たず、統語的に省略は不可能である。定冠詞、不定冠詞、無冠詞名詞のいずれとも共起する。

(10) a. Este cetățeanul cel mai devotat al României.

he is citizen-the most faithful 所有冠詞 Romania  
“彼はルーマニアの最も献身的な市民だ。”

b. Este un cetățean al României.                      c. Este cetățean al României.

he is a citizen 所有冠詞 Romania                      he is citizen 所有冠詞 Romania  
“彼はルーマニアの一市民だ。”                      “彼はルーマニアの市民だ。”

意味的な要因ではなく、統語的な要因で冠詞が生起不可能な場合がある。修飾要素を伴わない名詞が前置詞に支配される場合、定冠詞は生起しない(p.36)。

(11) a. Merg la Universitate.

I go to university  
“私は大学に行く。”

b. Pun cartea pe masă.

I put book-the on table  
“私はその本をテーブルの上に置く。”

これに対して、修飾要素が名詞に後続する場合には定冠詞が生起する。また、例外的に前置詞 cu は定冠詞を伴う名詞句を選択する。一部の人間を表す名詞も定冠詞を伴って生起する。

<sup>6</sup> (8c)のように属格もしくは与格名詞につく定冠詞は個別化の解釈も可能である。すなわち、先行文脈で言及している要素を指す解釈である。

- (12) a. pentru profesorul nostru      b. cu prietenii  
       for teacher-the our               with friends-the  
       “私たちの先生のために”       “友達と一緒に”
- c. pentru mama  
       for mother-the “母のために”

定を表す冠詞が他の語彙的要素と共起して個別化を行うこともある。所有形容詞・指示形容詞と共起する定冠詞、所有冠詞、指示冠詞がその例である<sup>7</sup>。複数の冠詞が共起する場合もある(pp.36-37)。

- (13) a. elevul meu                      b. acest elev al meu      c. copilul acesta  
       pupil-the my                      this pupli 所有冠詞 my          child-the this  
       “わたしの生徒”                “この私の生徒”                “この子供”
- d. copilul acesta al meu      e. colegul meu cel nou  
       child-the this 所有冠詞 my        colleague-the my 指示冠詞 new  
       “この私の子供”                “私の新しい同僚”

ルーマニア語の冠詞が担う重要な機能として、性・数を標示する機能に加え、他のロマンス諸語には見られない形態的機能がある(pp.39-41)。すなわち、名詞の格を標示する機能である。通常は定冠詞は名詞に付加されるが、形容詞が名詞に先行する場合、形容詞に付加される。

- (14) plecarea ciudatului oaspete  
       departure-the of-strange-the guest       “妙な客人の出立”

この機能は、他のロマンス諸語のもつ分析的(analitic)な性質とは異なり、ルーマニア語がラテン語の総合的(sintetic)な屈折形態を保持していることによるものである。

指示冠詞も格変化をするが、単独ではなく定冠詞とともに二重に格を標示する。

- (15) elevului celui bun  
       of-pupil-the 指示冠詞 good “そのよい生徒の”

所有冠詞はそれ自体は格変化をしないが、後続する名詞が与格ではなく属格であることを明示する機能をもつ。これは、ルーマニア語では属格と与格が同じ形式で標示されるため、属格であることを特に示さなければならない場合に有効である。

- (16) a. echipe apartinătoare clubului      Dinamo  
       team belonging to-club-the (与格)       “ディナモクラブ所属のチーム”
- b. echipe câștigătoare ale cupei  
       team winning 所有冠詞 cup-the (属格)       “優勝杯を手にしたチーム”

<sup>7</sup> 指示形容詞や所有形容詞が名詞に先行する場合には定冠詞は生起しない。この場合、所有形容詞は所有冠詞を伴う。

- a. acest student                      b. al meu student  
    this student “この学生”        所有冠詞 my student “私の学生”

以上のことから、スペイン語とルーマニア語の定冠詞は、意味的機能に関しては共通していると言えるが、格標示という形態的機能に関しては異なっている。更に、スペイン語の定冠詞の機能の一部はルーマニア語に特有の冠詞である所有冠詞や指示冠詞が担っているという点に留意する必要がある。

### 3. 両言語における定冠詞の対応関係

本稿では、文学作品の原典とその翻訳を用いて両言語の定冠詞の分布を観察する。分析資料として用いるのは、フランス人作家アンドレ・マルロー(André Malraux)作の「人間の条件」のスペイン語訳(La condición humana, César A. Comet 訳)とルーマニア語訳(Condiția umană, Irina Eliade 訳)の一部である。一方の言語のテキストにおいて生起する定冠詞が、もう一方の言語のテキストにおいてどのような形式で対応しているかを調べ、数値によってその傾向を示す。

#### 3.1. スペイン語の定冠詞のルーマニア語における対応表現

本節では、スペイン語の定冠詞がルーマニア語においてどのような形式で対応しているかを観察する<sup>8</sup>。結果は以下のとおりである。

スペイン語テキストにおける定冠詞のルーマニア語における対応<sup>9</sup>

ルーマニア語においても定冠詞で現われているもの	2319(76.6)
ルーマニア語において指示形容詞で現われているもの	18(0.6)
ルーマニア語において所有形容詞で現われているもの	29(1.0)
ルーマニア語においてゼロ冠詞で現われているもの	568(18.8)
ルーマニア語において不定冠詞で現われているもの	76(2.5)
ルーマニア語において上記以外の表現で現われているもの	19(0.6)
総数	3029(%)

これを、異なる形式で現われているもののみに注目して分布を比較すると、以下のようになる。

ルーマニア語において指示形容詞で現われているもの	18(2.5)
ルーマニア語において所有形容詞で現われているもの	29(4.1)
ルーマニア語においてゼロ冠詞で現われているもの	568(80)
ルーマニア語において不定冠詞で現われているもの	76(10.7)
ルーマニア語において上記以外の表現で現われているもの	19(2.7)
総数	710(%)

前節で見たように、両言語において定冠詞がはたす意味機能に共通点が多いという事実を考慮すると、一方の言語における定冠詞が他方の言語においても定冠詞で対応

<sup>8</sup> 本稿では、言語間の対応を見るために、一方のテキストにおいて生起する定冠詞を含む名詞句に、もう一方のテキストにおいて対応表現が見られない例は集計に含めていない。従って、テキストにおける定冠詞の実際の生起数はより大きいものとなる。

<sup>9</sup> 表中の百分率は、小数点以下第2位を四捨五入した数値である。従って、百分率の合計が100%にならない場合もある。



する場合が多いことが予想される。ここで注目すべきは、ゼロ冠詞が対応する例の割合が極めて高いという点と、指示形容詞が対応する例の割合が低いという点である。ゼロ冠詞は定性という観点からは不定と位置付けられるもので、定である定冠詞とは対立する要素であるとみなすことができる。それにもかかわらず対応例が多いという事実は、定冠詞とゼロ冠詞について何らかの考察が必要となることを示唆している。この点については、4.1 節で論じることとする。

指示形容詞は、定性という観点からは定冠詞と同じく定と位置付けられる要素である。定冠詞と共通する性質を有することから、一定数の対応が見られることも予想されるが、実際には全体の 0.6% と低い割合でしか現れない。これは、スペイン語の定冠詞とルーマニア語の指示形容詞の間で、機能の共通性よりも相違点が際立っているためであると考えられる。この点について論じるには、ルーマニア語の定冠詞とスペイン語の指示形容詞の対応についても考慮に入れなければならないため、4.4 節で扱うこととする。

また、不定冠詞への対応は全体の 2.5% となっている。定性に関して定冠詞と対立する要素であることから当然低いことが予想されるが、この数値は一定数の対応があることを示している。これについては 4.5 節で考察することとする。

所有形容詞への対応についても、1.0% と低い割合でしか見られない。この事実は、スペイン語の定冠詞とルーマニア語の所有形容詞との間に機能的共通性が少ないことを示していると言える。所有形容詞は名詞が指示する対象の所有者を示す要素であり、論理的には定性に関して定・不定の両方がありうるが、ルーマニア語では所有形容詞は定冠詞と共起する。

- (17) a. *cărțile mele*      b. *copiii noștri*      c. *paharele voastre*  
       books-the my            children-the our            glasses-the your  
       “私の本”                “私たちの子供”            “君たちのコップ”

このため、ルーマニア語の所有形容詞はスペイン語の定冠詞と定性に関して同じクラスに位置づけられる。そもそも所有形容詞は所有者を示すという機能がその本質的特徴であるのに対して、定冠詞は意味的に希薄な要素であるため、人称という独自の意味を持つ所有形容詞とは区別されて当然である。スペイン語の定冠詞には所有者を指示する機能が限られているために、ルーマニア語の所有形容詞との対応が少ないと考えることができる<sup>10,11</sup>。

<sup>10</sup> スペイン語の定冠詞にも、所有形容詞と共通する機能をもつと考えられる例が存在する。

Se lavó la cara.  
 (he) himself washed the face “彼は顔を洗った。”

譲渡不可能な名詞句に定冠詞が添えられた場合、文の中に生起する要素が所有者として解釈される。このような機能は、4.3 で述べるようにルーマニア語の定冠詞も共有することから、場合によってスペイン語とルーマニア語の両言語において定冠詞が用いられることになる。

<sup>11</sup> ルーマニア語の定冠詞とスペイン語の所有形容詞の対応についてはこれと異なる傾向が観察される。これに関しては 4.3 で考察する。

### 3.2. ルーマニア語の定冠詞のスペイン語における対応表現

本節では、ルーマニア語の定冠詞がスペイン語においてどのような形式で対応しているかを観察する。結果は以下のとおりである。

ルーマニア語テキストにおける定冠詞のスペイン語における対応

スペイン語においても定冠詞で現われているもの	2319(82.5)
スペイン語において指示形容詞で現われているもの	67(2.4)
スペイン語において所有形容詞で現われているもの	150(5.3)
スペイン語においてゼロ冠詞で現われているもの	231(8.2)
スペイン語において不定冠詞で現われているもの	37(1.3)
スペイン語において上記以外の表現で現われているもの	7(0.2)
総数	2811(%)

これを、異なる形式で現われているもののみに注目して分布を比較すると、以下のようになる。

スペイン語において指示形容詞で現われているもの	67(13.6)
スペイン語において所有形容詞で現われているもの	150(30.5)
スペイン語においてゼロ冠詞で現われているもの	231(47.0)
スペイン語において不定冠詞で現われているもの	37(7.5)
スペイン語において上記以外の表現で現われているもの	7(1.4)
総数	492(%)

スペイン語の定冠詞とルーマニア語の対応表現の場合とを比較すると、スペイン語におけるゼロ冠詞の対応例の割合がより低い点と、スペイン語における所有形容詞の対応例の割合がかなり高くなっている点が顕著である。指示形容詞については、スペイン語において指示形容詞で現われている例(2.4%)がルーマニア語において指示形容詞で現われている例(0.6%)よりも若干割合が高くなっているが、両者とも相対的には低い数値である。また、不定冠詞の対応例については両者で割合が類似している。次節では、それぞれの対応例について考察を進めていく。

## 4. 定冠詞が異なる形式に対応する例の分析

本節では、一方の言語における定冠詞が他方の言語において別の形式で対応する例について、形式ごとに分けて分析を進めていく。

### 4.1. スペイン語の定冠詞 → ルーマニア語のゼロ冠詞

スペイン語の定冠詞がルーマニア語においてゼロ冠詞で現われている例は、568 例あり、全体の 18.8%を占めている。この中で、圧倒的に多いのはルーマニア語において前置詞の目的語となっている場合で、509 例あり、ゼロ冠詞全体の 89.6%を占める<sup>12</sup>。

<sup>12</sup> 例文にはテキストにおいて現れるページを示している。

(18) a. Chen estaba frente a la luna interior del ascensor. (E p.14)<sup>13</sup>  
 was opposite to the mirror interior of the elevator

b. Cen se afla în fața oglinzii din ascensor. (R p.28)

was opposite mirror-the of elevator

“チェンはエレベーターの中の鏡に向き合っていた。”

これは、2.2.2 で見たように、修飾要素を伴わない名詞が前置詞に支配される場合に定冠詞が生起しないというルーマニア語固有の統語的制約によるものである。なお、Pană Dindelegan(2003)は前置詞 *cu* が例外的に定冠詞を伴う名詞句を選択すると指摘していたが、*cu* が無冠詞名詞句を選択している例も 17 例見られた。以下に一例を示す。

(19) Katov dădu din umeri, ca și cum ar fi vrut să dea să  
 gave from shoulders as if (he) would have wanted that (he) give that  
 se înțelege că planul se impunea cu evidență. (R p.36)  
 it is understood that plan-the is necessary with clearness

“カトフはその計画は明らかに必要であるのは言うまでもないということを示すかのように肩をすくめてみせた。”

この事実は、前置詞が無冠詞名詞句を好むという傾向がルーマニア語において極めて高いということを示している。

前置詞の目的語に次いで多いのは直接目的語で 33 例あり、5.8%を占める。

(20) a. ¡Que los imbéciles obreros fuesen a fabricar las armas destinadas a matar  
 that the foolish workers went producing the weapons intended for killing  
 a quienes combatían por ellos! (E p.13)  
 those who were fighting for them

“愚かな労働者たちは、自分たちのために闘ってくれる人間を殺す武器を作りに行ったんだ。”

b. Când te gîndești că niște muncitori imbecili fabricau arme, destinate să-i  
 when you think that some workers foolish produced weapons intended that  
 omoare pe cei care luptau pentru ei! (R p.26)

kills those who were fighting for them

“愚かな労働者たちが、自分たちのために闘ってくれる人間を殺す武器を作ったんだと考えるとね。”

これに次ぐのが主語で 14 例（うち倒置主語 5 例）あり、2.4%を占める。

<sup>13</sup> 以下ではスペイン語とルーマニア語の例文を並置する場合、スペイン語を E、ルーマニア語を R と表記して区別する。また日本語訳については、スペイン語とルーマニア語の例文で同じ意味の場合にはまとめて一つの訳文を示し、両言語の例文で意味が異なる場合にはそれぞれに訳文を示すこととする。

(21) a. Los dos tercios del batallón habían avanzado. (E p.64)

the two thirds of the batallion had advanced

b. Două treimi dintre oameni făcură un pas înainte. (R p.88)

two thirds of men made a step forward

“大隊の三分の二が前に出ている。”

主語と直接目的語が一定数見られるのは、省略されない限り必ず完全な文において存在する要素であるという主語の性質と、他動詞文においてはほぼ必ず生起するという直接目的語の性質を考慮すると当然である。しかし、直接目的語の方が主語よりも多いという事実は、後者のみをもつ自動詞文の存在を考えると一考の価値があると言えよう。

その一つの要因として考えられるのが、両者が文において占める構造的位置の違いである。直接目的語は言うまでもなく他動詞によって選択される要素であり、他動詞と直接目的語は統語的にも意味的にも一つのまとまりとして機能する動詞句を形成する。このため両者の結びつきが強くなり、ある程度固定化された動詞句表現として用いられることもある。表現として固定化されると、名詞が特定の指示対象を指し示す機能が弱まり、冠詞が脱落するという傾向が一般に見られる。実際に見られた用例としては、a acorda credite「信用貸しをする」、a avea noroc「運がある」、a da ordin「命令を出す」、a cere bani「お金を求める」、a fabrica arme「武器を製造する」、a face apel「訴える」、a face călătorii「旅行する」、a juca biliard「ビリヤードをする」、a lua arma「武器を取る」、a lua înfățișare「容貌を呈する」、a organiza uniuni「協会を組織する」、a primi comenzi「命令を受ける」、a plăti chirie「家賃を払う」、a refuza comision「依頼を拒否する」、a respinge gând「考えをはねのける」、a vorbi franceză「フランス語を話す」などがある。これらの例では、直接目的語の名詞が文脈において特定化される指示対象をもつのではなく、動詞と名詞が固定的に結びつき、一般的な行為を表す表現となっている<sup>14</sup>。これに対して、主語という要素は統語的に動詞句の外にあると分析されることが多いように、固定化された熟語表現の一部を形成することは多くはない<sup>15</sup>。このことが、直接目的語にゼロ冠詞が比較的多く見られるのに対して、主語において相対的に少ないという事実の一つの要因となっていると言えよう。

#### 4.2. ルーマニア語の定冠詞 → スペイン語のゼロ冠詞

ルーマニア語の定冠詞がスペイン語においてゼロ冠詞で現われている例は、231 例あり、全体の 8.2%を占めている。スペイン語の定冠詞がルーマニア語においてゼロ冠詞で現われている割合は 19.0%であったので、ルーマニア語に比べてスペイン語ではゼロ冠詞の生起する割合が低くなってはいるが、全体に占める割合としては決して低くはない数値であると言える。スペイン語におけるゼロ冠詞の機能については、Laca(1999)は、無冠詞名詞句は必ず文脈に依存して解釈され(p.898)、それ自体で特定の個物や事物の部分の指示をすることができない(p.900)と説明する。また、Matte

<sup>14</sup> ルーマニア語では、動詞を不定形で示す場合、英語の to に相当する a という形式を添える。

<sup>15</sup> 生成文法をはじめとする統語理論において、文の構造において主語が階層的に高い位置に位置づけられることは、このような言語直観を反映しているものと言える。

Bon(1995)は、無冠詞名詞句においては演算子  $\varphi$  が関与すると分析するが、この演算子は名詞によって表わされる概念・範疇を直接的に指示すると主張しており(pp.214-215)、Laca と基本的に同じ方向性にあると言える<sup>16</sup>。ルーマニア語では、前置詞句の目的語において無冠詞名詞句が要求されるという統語的要因によるものが大半を占めているが、スペイン語におけるゼロ冠詞がどのような統語的環境において生起しているかを以下で観察する。

統語的分布を見る前に、留意しなければならない点がある。語彙的な理由でスペイン語ではゼロ冠詞が用いられるのに対し、ルーマニア語では定冠詞を伴う場合である。一つは国名・地名・肩書を示す名詞であり、China「中国」、Elveția「スイス」、Franța「フランス」、Marii Britanii「英国」、Parisul「パリ」、Rusia「ロシア」、Shanghaiul「上海」、Ucraina「ウクライナ」、Ungariei「ハンガリー」、Sfântul Augustin「聖アウグスティヌス」など 25 例見られた。また、不定代名詞 uno「あるもの」もスペイン語では無冠詞なのに対し、ルーマニア語では定冠詞を伴う要素で、37 例見られた。数量詞 todo「すべて」も同様に 6 例見られた。

これらの例を除いた 163 例について統語的な分布を見ると、最も多いのはスペイン語で前置詞句となっている 91 例であり、全体の 55.8%を占める。この中で、ルーマニア語において修飾要素を伴っている例に対応するスペイン語の例は 31 例、ルーマニア語において属格となっている例に対応するスペイン語の例は 23 例である。これら二つの対応例は、既に述べたようにルーマニア語固有の形態統語規則によって定冠詞が要求されるものである。その他の例は 37 例となっており、このうちスペイン語でもルーマニア語でも前置詞の目的語となっている例は 25 例となっている。以下に一例を示す。

(22) a. De fapt, arareori se întâmplă ca să-și recunoască cineva propria voce când  
in fact rarely happens that himself recognizes someone own voice when  
o aude pentru prima oară. (R p.34)  
it hears for first-the time

b. Es raro que reconozca uno su propia voz, ¿sabe?, cuando se oye por  
it is rare that recognizes one his own voice you know when it is heard for  
primera vez. (E p.19)  
first time

“実際、自分の声というのは聞き分けにくいものですよ。初めて聞くときはね。”

このことから、ルーマニア語の定冠詞形がスペイン語の前置詞の目的語としてゼロ冠詞形に対応する例は、形態統語的な規則を除いても一定数見られると言える。

前置詞の目的語に次いで多いのはスペイン語における名詞文の 40 例（うち修飾要素を含む名詞句が 6 例）であり、24.5%を占めている。これにスペイン語において主語となっている 10 例（うち倒置主語が 7 例）が続き、6.1%を占める。それ以外の例は

<sup>16</sup> Martínez Álvarez(2000)は連続的な名詞(nombres continuos)及び非連続的な名詞(nombres discontinuos)と冠詞の使用との関係について論じ、前者においては数の区別が関与的でないため、ゼロ冠詞の使用がより多く認められる事実を指摘している(p.300)。



文体となり、並列表現で提示される要素の対比がより鮮明に読み手に伝わるという効果がある<sup>18</sup>。ルーマニア語においては、このような傾向が今回の調査では見られなかったことから、ルーマニア語では文体的な要因よりも文法的な要因によってゼロ冠詞が用いられる傾向が強いということが言えよう。

総括すると、ルーマニア語ほどではないにせよ、スペイン語においても前置詞がゼロ冠詞名詞句を選択する傾向が一定数見られると同時に、名詞文においてゼロ冠詞が用いられるというスペイン語固有の特徴も観察される。また、並列表現における強調という文体的な要素もスペイン語においてはゼロ冠詞使用の要因となっている。

#### 4.3. 所有形容詞が対応する場合

ルーマニア語の定冠詞がスペイン語において所有形容詞で現われている例は、150例あり、全体の5.3%を占めており、これはかなり高い割合であると言える。ルーマニア語において所有を表す定冠詞がどのような分布になっているかを見るためにこれを文法機能ごとに分けてみると、主なものはルーマニア語における直接目的語 74例(49.3%)、前置詞の目的語 26例(17.3%)、属格名詞句 18例(12%)、主語 16例(10.7%、うち倒置主語 1例)となる<sup>19</sup>。以下にそれぞれの例をあげる。

##### I. 直接目的語

(26) a. *Întinse mîna.* (R p.33)

he reached hand-the “彼は手を差し出した。”

b. *Extendió su mano cuadrada.* (E p.18)

he reached his hand square “彼はがっしりした手を差し出した。”

##### II. 前置詞の目的語

(27) a. *Îl apucă cu mîna dreaptă.* (R p.22)

it he took with hand-the right

b. *Lo hizo pasar a su mano derecha...* (E p.10)

it he made pass to his hand right “彼はそれを右手に持ち変えた。”

##### III. 属格名詞句

(28) a. *Katov, auzind rîciitul unghiilor pe metal, începu să scrișnească din dinți.*

hearing scratch-the of-nails-the on metal began that he gnash from teeth

(R p.39)

b. *El roce de su uña doblada sobre una hoja de lata hizo rechinar los dientes*

the scratch of his nail twisted on a tin-plate made grind the teeth

<sup>18</sup> Butt and Benjamin(2004)は、スペイン語において本や映画のタイトルでは定冠詞が省略されると述べている(p.33)。これは、ゼロ冠詞を用いることによって名詞表現そのものを前面に出し、際立たせる効果があると考えられる。並列表現におけるゼロ冠詞の使用もこれと同様の効果を生み、読み手に強い印象を与えることによって名詞同士の対比がより鮮明になると考えられる。Grevisse(1993)はフランス語について、並列表現で冠詞を省略することで表現に生き生きとした印象を与えるとしている(p.880)。スペイン語においてはフランス語ほどこの文体的特徴が顕著ではないものの、一定の割合で観察されると言える。

<sup>19</sup> ここで言う属格名詞句は、スペイン語では前置詞 de によって導かれ、所有を表す名詞句を指す。

de Katow. (E p.24)

of

“ブリキの上を引っかいている彼の爪の音は、カトフの歯をぎりぎりさせた。”

#### IV. 主語

(29) a. Textul era destul de lung. (R p.30)

text-the was enough long

b. Su texto era largo. (E p.16)

its text was long “その文書はかなり長かった。”

これに対して、スペイン語の定冠詞がルーマニア語の所有形容詞に対応している例は、既に見たようにわずかに 29 例であり全体の 1.0%に過ぎず、明らかに不均衡が観察される。一方の定冠詞が他方の所有形容詞に対応しているということは、その定冠詞が所有の意味を担っていることを意味する。スペイン語の定冠詞にも所有を表す機能はあるが、基本的に(30a, b)の示すように譲渡不可能名詞の場合に限られる。

(30) a. Bajó la cabeza.

he lowered the head “彼は頭を下げた。”

b. Le ataron las manos a la espalda.

him they tied the hands at the back “彼は後ろ手に縛られた。”

これに対してルーマニア語の定冠詞は、譲渡不可能名詞以外の名詞の場合にも所有の機能が見られる<sup>20</sup>。上記の 149 例において用いられている名詞は 113 種類を数え、その中には譲渡可能名詞が 99 種類にも及ぶ。armată「軍」、articol「記事」、cauză「理由」、clienți「客」、document「文書」、drapel「旗」、echipaj「乗組員」、fericire「幸福」、gest「身ぶり」、gînduri「考え」、lăzi「箱」、mînie「怒り」、moarte「死」、promisiune「約束」、supuși「家臣」など、意味的に実に多様な名詞が数多く含まれている。このことから、ルーマニア語の定冠詞はスペイン語のそれと比較し、かなり広い範囲の意味に対応する名詞の所有を表す機能をもっていると考えられる。

ここで、ルーマニア語の統語的特徴として留意しておくべき点を指摘したい。それは、与格人称代名詞と定冠詞形の名詞句が共起し、所有者が与格人称代名詞で表される構文がルーマニア語では頻繁に用いられるという事実である。Negritescu and Arrigoni(2014)はこれを所有の与格と呼び、ルーマニア語に特徴的な構文としている(p.106)。Lombard(1974)は、ルーマニア語における所有形容詞の使用頻度は西のロマンス諸語に比べて低く、所有の与格の使用頻度がかなり高いと指摘している(p.124, p.158)。Guillermou(1953)は、所有される要素がどのような文法機能をもっているかこの構文が用いられると述べているが(pp.68-69)、Negritescu and Arrigoni は特に直接目的語と主語の場合に使用が顕著であるとする(pp.106-107)。今回の調査では、この構文に該当する例は 61 例に上った。以下にその一例を示す。

<sup>20</sup> 譲渡不可能名詞は言語によってさまざまな定義がありうる概念であるが、本稿では身体部位を表す名詞に限定している。



- (31) Își puse haina, pe care n-o încheia niciodată pînă sus,...  
 himself (与格) he put on jacket-the which not buttoned up never up to top  
 “彼は上着を着た一ボタンを決して一番上までかけたことはなかった。” (R p.36)

この構文では、文中の先行詞によって束縛される再帰代名詞的機能を定冠詞形名詞句がはたしていると考えることができる。この構文の存在が、ルーマニア語において被所有物を表す名詞句において所有形容詞の代わりに定冠詞が生起する一つの要因であると言える。

次に、文法機能における分布の偏りについて触れておきたい。本節で扱う対応パターンにおいて極めて高い割合を占めるのが直接目的語である。これは、被所有物の所有者が所有の与格で表される構文において、被所有物を表す名詞句が直接目的語である下位分類が最も一般的であるためである。このパターンに属する例は 52 例である。これに続いて多いのは、主語名詞句における定冠詞が所有の意味をもつ場合で、8 例観察される。これは、すでに述べた与格人称代名詞が所有者を表す構文であったり、文脈によって所有者が了解されることが可能である例である。前者の用法は再帰代名詞的機能、後者は人称代名詞と同様に比較的遠い位置にある要素と同一指示となる代名詞的機能と捉えることができる<sup>21</sup>。このように、所有者が構造上、あるいは文脈上明らかでない場合において、ルーマニア語では定冠詞が被所有物を表す名詞句を決定する機能がかかなり広い範囲でみとめられると言える。

最後に、所有を表す機能について、スペイン語の定冠詞との違いに触れておきたい。3.1 節で述べたように、スペイン語では定冠詞が所有者を表す機能は限られており、定冠詞と所有形容詞が対応する比率で見ると、スペイン語の定冠詞—ルーマニア語の所有形容詞は 1.0%であるのに対して、ルーマニア語の定冠詞—スペイン語の所有形容詞は 5.3%とかなり異なる数値となる。これは、ルーマニア語の定冠詞がスペイン語に比して所有の機能をもつ頻度が高いことを意味しているが、この原因として両言語の所有形容詞の統語的な特徴があげられる。スペイン語の所有形容詞は定冠詞と同じく名詞に先行する位置に生起し、そのため冠詞を伴わないのに対して、ルーマニア語の所有形容詞は 3.1 節で述べたように名詞に後続する位置に生起する上に、定冠詞と共に共起する<sup>22</sup>。このことは、所有形容詞の占める統語的位置が通常の形容詞と同じく、名詞句内で焦点が置かれやすい位置であることを意味している。このため、ルーマニア語の所有形容詞はスペイン語の所有形容詞よりも情報的に重要な位置を占める場合に用いられるのに適しており、それ以外の場合には不向きな要素であると言える。従って、所有者の情報的価値がそれほど高くない場合、例えば文脈から容易に理解される場合には統語的により軽い要素、すなわち決定詞の位置を占める定冠詞が所有形容詞の代用として用いられると考えられる。すでに述べた、与格人称代名詞が所有者を表す用

<sup>21</sup> 生成文法の観点からは、再帰代名詞的機能は照応表現(anaphor)、代名詞的機能は代名詞表現(pronominal)にそれぞれ対応するものである。

<sup>22</sup> スペイン語には名詞に先行する所有形容詞(短形)の他に、名詞に後続し冠詞と共に共起するもの(長形)が存在する。長形は統語的には決定詞ではなく名詞を修飾する要素として品質形容詞と同等に位置付けられるものなので、本稿では考察の対象とはしない。

法が頻繁に用いられることも、ルーマニア語におけるこの傾向を強めていると言える。

#### 4.4. 指示形容詞が対応する場合

3節で述べたように、スペイン語の定冠詞がルーマニア語の指示形容詞に対応している例は、全体の0.6%と極めて低い割合となっている。この傾向は、ルーマニア語の定冠詞がスペイン語の指示形容詞に対応している例の場合にも同様である(2.4%)が、こちらの方が若干高くなっている。以下にそれぞれの言語において指示形容詞が対応している例を示す。

##### I. スペイン語の定冠詞がルーマニア語の指示形容詞に対応している例

(32) a. Pensaba en esto con la misma compleja inquietud con que había  
he was thinking of that with the same complex anxiety with that he had  
contemplado, cuando niño, las amígdalas que el cirujano acababa de cortarle.  
contemplated when child the tonsils that the surgeon had just cut him  
(E p.28)

b. Își amintea întâmplarea cu acea neliniște ciudată simțită în copilărie, când,  
he remembered event-the with that anxiety strange felt in childhood when  
după ce-l operase, doctorul îi arătase amigdalele pe care i le scosese....  
after him he operated doctor-the him showed tonsils-the which him he had pulled  
(R p.45)

“彼はそれを、子供の頃外科医が切り出した自分の扁桃腺を見たときに感じたような、複雑な不安をもって思い出していた。”

##### II. ルーマニア語の定冠詞がスペイン語の指示形容詞に対応している例

(33) a. Dintr-o dată, fără ca să se fi întâmplat ceva anume, Cen avu  
at once without that happened something particular had  
certitudinea că omul murise. (R p.24)  
confidence-the that man-the died

b. Sin que nada exterior sobreviniese, tuvo la certidumbre de que aquel  
without that nothing external occurred he had the confidence that that  
hombre estaba muerto. (E p.12)  
man was dead

“何ら特別なことは起こらなかったが、彼は突然、この男が確かに死んでいると  
いうことを確信した。”

定冠詞と指示形容詞は、定性という観点からは定という性質を共有しているが、定性以外の点で両者の機能が明確に区分され、その区分が両言語において共通しているためにこのような傾向が見られると考えられる。2節で見たように、Hernández Alonso(1984)は、定冠詞の特性として、それ自体の意味内容を欠き一般的な性質を持つ指示子(indicador)であると指摘している。これに対して指示形容詞を含む指示詞について、Matte Bon(1995)は、その機能は明示的もしくは非明示的に既に現れた名詞を、発話行為の時間的・空間的座標を考慮に入れつつ、文法的人称に関係づけながら位置



は 1.3%となっている<sup>23</sup>。

文法機能という観点から見ると、ルーマニア語において不定冠詞が生起する場合で最も多いのが前置詞の目的語で 36 例あり、続いて直接目的語が 17 例、主語が 11 例（うち倒置主語が 2 例）の順となっている。スペイン語において不定冠詞が生起する場合には、前置詞の目的語が 14 例、直接目的語が 12 例、主語が 6 例（うち倒置主語が 1 例）となっている。以下に代表的な例を示す。

I. スペイン語の定冠詞がルーマニア語の不定冠詞に対応している例

(35) a. Se levantaba. Fue a ver el grillo dormido en su jaula minúscula:

he was standing up he went seeing the cricket slept in its cage small (E p.17)

b. Acum se ridicase de pe scaun ca să se uite la un greier aflat într-o  
now he had stood up from chair so that he may look at a cricket found in a  
minuscule colivie. (R p.31)

small cage

“彼は立ち上がって、小さなかごの中で眠っているコオロギを見に行った。”

II. ルーマニア語の定冠詞がスペイン語の不定冠詞に対応している例

(36) a. Kyo alcătuieste primul detașament de legătură, care reunea o sută

had created first-the unit of liaison which assembled a hundred  
douăzeci de bicicliști. (R p.38)

twenty cyclists

b. Kyo había creado un primer destacamento de unión, de ciento veinte  
had created a first unit of liaison of hundred twenty  
ciclistas. (E p.23)

cyclists

“キョウは百二十人からなる最初の自転車連絡隊をつくった。”

既に述べたように定冠詞と不定冠詞は定性に関して対立する要素であり、本来対応することはまれであるように予想される。しかし、今回の調査によって得られた数値は決して低いと断言できるものではない。これは、言語運用において、定と不定という対立が絶対的なものとは限らず、若干の連続性をもっていると考えられる。Fujita(2012)ではスペイン語とフランス語について、また Fujita(2013)ではスペイン語とイタリア語について、それぞれ不定冠詞の分布の観察をもとにして、不定冠詞と定冠詞の機能は必ずしも相反するものではなく、両者の関係は連続的なスケールでとらえられるものであると論じている。同様の傾向は、今回の定冠詞の分布をもとにした観察からスペイン語とルーマニア語においても見られると言える。両者の割合を比較すると、スペイン語における不定冠詞の生起例が幾分少ないものの、顕著な差は見られない。このことから、今回の調査の結果からは、両言語における定冠詞と不定冠詞

<sup>23</sup> 本稿における分類では、両言語において不定冠詞複数形を含めている。これは名詞の複数形と共起し、不定数の非連続的な要素を示すものである。スペイン語では *unos*、ルーマニア語では *niște* が該当する。

との関係において大きな違いは観察されないということになる。

ここで補足しておきたいのは、定で表すか不定で表すかという選択は、発話者、文語テキストの場合は書き手の判断にゆだねられるという点である。本稿ではコーパスとして翻訳テキストを用いているが、翻訳とは一方の言語から他方の言語への機械的な置き換えではなく、翻訳の目標言語において自然な表現へと変換することがしばしば行われ、その判断は言語としての特質に基づいたものもあれば、翻訳者の文体的な志向に大きく影響を受ける場合もある。例えば、以下の例は後者に属すると考えられるものである。

(37) a. El silbido del primer disco cubrió al segundo. De pronto, se detuvo

the whistle of the first record covered the second immediately stopped

—se oyó: *enviar*—; luego, continuó. (E p.19)

was heard send then continued

“第一のレコードの雑音が第二のレコードの音を覆った。急にその雑音が止まった。すると「送る」という言葉が聞こえ、それからまた雑音が始まった。”

b. Se auzi un fluierat, urmat imediat de un ai doilea de pe celălalt disc,

was heard a whistle followed immediately by one second of another record

și apoi se auzi *a trimite*, apoi iar fluierături. (R p.34)

and then was heard send then again whistles

“雑音が聞こえた後、急に別のレコードの二番目の音が続いた。それから、「送る」という言葉が聞こえ、その後また雑音が始まった。”

(38) a. Libertatea totală pe care o dobîndise îl lăsa pradă doar propriului

freedom-the total which it he-obtained him let prisoner just his own

mod de a gîndi. (R p.77)

way of thinking

b. ...una libertad total le entregaba totalmente a su idea. (E p.55)

a freedom total him left totally to his idea

“彼が手に入れた完全な自由が彼を全く思想のとりこにしている。”

(37)では、スペイン語テキストでは主語の「雑音」が修飾要素を伴っているために定冠詞が用いられているが、ルーマニア語テキストでは対応する語が修飾要素なしで新たに提示される要素として倒置主語の形で生起しているため、不定冠詞が用いられている。また、(38)では、ルーマニア語テキストでは主語の「完全な自由」が関係節による修飾要素を伴っているために定冠詞が生起しているが、スペイン語テキストでは主語に修飾要素が付加されていないために、対応する要素が、主語という位置は同じであるにもかかわらず、新出の要素として不定冠詞が用いられている。

両言語における定冠詞と不定冠詞の関係については、様々な角度から更に考察を進めなければならないが、そのためには複数のテキストからのデータ収集が必要となってくるため、今後さらに検討を進めていく必要がある。

## 5. 結論

スペイン語とルーマニア語における定冠詞の分布と他の要素との対応関係をもとに、両言語における定冠詞の特性を対照的に考察してきたが、両言語における共通点と相違点は以下のようにまとめられる。

- 共通点
- i) 指示性の高さという点において性質が異なる指示形容詞との機能分化が明瞭である。
  - ii) 定性の値が異なる不定冠詞との機能分化がある程度なされているが、定冠詞に不定冠詞が対応している例が一定数観察される。このことから、定冠詞と不定冠詞の間に若干の機能的連続性が存在すると考えられる。
  - iii) ゼロ冠詞との交替が一定の割合で観察される。
- 相違点
- i) スペイン語の定冠詞にルーマニア語のゼロ冠詞が対応している例の方が、ルーマニア語の定冠詞にスペイン語のゼロ冠詞が対応している例よりも多い。
  - ii) スペイン語のゼロ冠詞が対応している例がある程度見られるのは、ルーマニア語の定冠詞が格標示の機能、及び修飾要素が後続することを明示する機能を担うという、形態統語的な特徴によるところが大きい。その一方で、前置詞の目的語、名詞文、並列表現といった環境において、スペイン語でも一定数のゼロ冠詞が観察される。
  - iii) ルーマニア語の定冠詞がスペイン語の所有形容詞に対応する例が一定の割合で観察される。これに対して、スペイン語の定冠詞がルーマニア語の所有形容詞に対応する例は少ない。これは、ルーマニア語において所有の与格という構文が頻繁に用いられるという統語的特徴によるところが大きい。与格人称代名詞が生起しない例も多く見られることから、ルーマニア語の定冠詞はスペイン語の所有形容詞の機能の一部をになっていると言える。
  - iv) スペイン語の指示詞は三項体系であるために、人称代名詞の体系と密接な関連性をもつことから、遠称の指示形容詞と定冠詞の機能が近く、二項体系のルーマニア語の指示形容詞よりも対応関係が多く見られる。

以上の結果から、両言語の定冠詞は基本的な性質を共有しているものの、一部でその機能に相違点があると言える。所有表現についてはルーマニア語の特異性が従来の研究において指摘されていたが、本論でそれが統計的に証明されたことになる。また、ルーマニア語ではスペイン語よりもゼロ冠詞の生起が多く観察されるという特徴が、本稿での調査によって確認された。この特徴は、同じロマンス諸語に属する両言語の相違点として注目すべき点であると言える。これとは別に、筆者の従来の研究で指摘されたスペイン語ではゼロ冠詞の生起が比較的多く観察されるという事実が、本研究でも確認された。他の要素、例えば指示形容詞や不定冠詞の生起例の割合に比べると明らかに高い数値を示しており、スペイン語においても一定の環境において比較的指

示性の高い要素を指示する名詞がゼロ冠詞を伴うことが再確認されたと言える。さらに、指示形容詞と定冠詞の親和性がルーマニア語に比してスペイン語においてより高いことが示されたのも重要な発見と言える。

今回の調査では、一つの文学作品のみを分析対象としたが、別のテキストも分析対象に含めることにより、統計的に更に信頼できる形で今回の結果を検証することを今後の課題としたい。

#### 参考文献

- Butt, John and Carmen Benjamin (2004) *A New Reference Grammar of Modern Spanish*, Arnold, London.
- De Bruyne, Jacques (1995) *A Comprehensive Spanish Grammar*, Blackwell Publishing, Oxford.
- Enríquez, Emilia-V.(2000) “El sistema pronominal del español”, in Alvar, Manuel (ed.), *Introducción a la Lingüística española*, pp.307-329, Editorial Ariel, Barcelona.
- Fujita, Takeshi (2012) “Considérations contrastives de l’article indéfini en français et en espagnol”, 『北海道大学文学研究科紀要』, 第138号, pp.31-62.
- Fujita, Takeshi (2013) “Propiedades sintácticas del artículo indefinido en español y en italiano”, 『北海道大学文学研究科紀要』, 第141号, pp.1-34.
- Goga, Mircea (2001) *Limbă română—Morfologie Sintaxă Ghid de analiză morfosintactică*, Editura Limes, Cluj.
- Grevisse, Maurice (1993) *Le bon usage*, Duculot, Paris.
- Guillermou, Alain (1953) *Manuel de langue roumaine*, Éditions Klincksieck, Paris.
- Hernández Alonso, César (1984) *Gramática funcional del español*, Gredos, Madrid.
- Laca, Brenda (1999) “Presencia y ausencia de determinante”, in Bosque, Ignacio and Violeta Demonte (eds.), *Gramática Descriptiva de la Lengua Española*, pp.891-928, Espasa, Madrid.
- Leonetti, Manuel (1999) “El artículo”, in Bosque, Ignacio and Violeta Demonte (eds.), *Gramática Descriptiva de la Lengua Española*, pp.787-890, Espasa, Madrid.
- Lombard, Alf (1974) *La langue roumaine*, Éditions Klincksieck, Paris.
- López García, Ángel (1998) *Gramática del español III. Las partes de la oración*, Arco Libros A.A., Madrid.
- Martínez Álvarez, Josefina (2000) “Nombres discontinuos y artículo”, in Alvar, Manuel (ed.), *Introducción a la Lingüística española*, pp.299-305, Editorial Ariel, Barcelona.
- Matte Bon, Francisco (1995) *Gramática Comunicativa del español Tomo I*, edelsa, Madrid.
- Negritescu, Valentina and Davide Arrigoni (2014) *Grammatica romena*, Ulrico Hoepli Editore, Milano.
- Pană Dindelegan, Gabriela (2003) *Elemente de gramatică*, Humanitas Educațional, București.
- Salvá, Vicente (1988) *Gramática de la lengua castellana I*, Arco Libros A.A., Madrid.
- Satorre Grau (2000) “El artículo”, in Alvar, Manuel (ed.), *Introducción a la Lingüística española*, pp.271-298, Editorial Ariel, Barcelona.
- 藤田 健 (2018) 「フランス語とルーマニア語における定冠詞の分布について」, 『北海道言語文化研究』,

第16号, pp.63-85.

引用テキスト

André Malraux (1979) *La condición humana*, Traducción César A. Comet, Edhasa, Barcelona.

André Malraux (1994) *Condiția umană*, traducere Irina Eliade, RAO, București.

執筆者紹介

所属：北海道大学大学院文学研究科西洋言語学講座

E-mail : fujitat@let.hokudai.ac.jp

専門分野：統語論、ロマンス語学